

第3回学校運営協議会

大阪教育大学 教授 平賀 健太郎 様

大阪はびきの医療センター 小児科主任部長 亀田 誠 様

帝塚山学院大学 教授 大堀 彰子 様

羽曳野市立羽曳が丘小学校長 前田 幸章 様

資料確認

1 学校長挨拶

第3回にご参加いただきありがとうございます。第3回は、今年度経営した内容と来年度の学校経営計画について、話し合っていたきたいと思います。

どこまで府の子どもたちに貢献できたかを検証していきたいと思いますので、忌憚のない意見をお聞かせいただきたい。

R7年度の学校経営計画及び学校評価について

資料参照

評価指標については、年度当初に確認が済んでいる。3 本年度の取り組み内容及び自己評価

- 1 児童生徒一人ひとりの学習支援クラウドサービスの利用状況については、教科や教員によって差があるので、教育活動においてより一層の活用が課題になる。

オンデマンド授業は一定の教育内容の均質化が必要となるので、オンライン授業の内容も検討する。オンライン校外学習やオンライン修学旅行等の行事でVTR配信をおこなったが課題が残った。

阪南マルシェや母子分教室の作業学習で作業で作成した製品の種類分の学習できた。教員向けの体験や研修を実施したが、今後授業の中でどのように子どもに学ばせるかについては、検討が必要

- 2 府立学校としての、センター的機能としての不登校支援

羽曳野市教委と支援について、協議し適応指導教室での協働した心を実施することができた。専門図書については、図書の利用状況はカートを利用することによって改善し利用率もあがった。

- 3 安全で安心な

どのような授業の中で取り入れるかが課題となっている。児童や生徒の人権や道徳の授業など、少人数の集団の中でどう実施していくかが課題となっている。

4 働き方改革

8分掌を5分掌に再編して、業務内容の見直しについても実施、スリム化を実施した。1分掌、1委員会で教員の負担の軽減については、一定実施できたのではないと思う。引き続き業務内容の精選を進めていきたい。

平賀 子どもたちの実態が多様で在籍期間が様々で流動的で、子どもたちが元の学校にもどっていくというのが、この学校の特徴だと思う。他の学校とか、目標とか評価の観点とか違ってくるかと思う。

大堀 この学校に転入している方が学力が上がっている場合が多い。

校長 辛い所に手が届く学習指導は、そのとおりだが、地域の学校にもどってからのことも考えると今の指導状況はどうかなと思う時もある。

大堀 原籍校とのカンファレンスもしっかりやっておられるとう。ポイントをしっかり伝えていくことも必要かと思う。それが大切。

前田 個別指導というのが本当に大切。原籍校とどうつながっていくところが課題になるが、何回ぐらいのイメージなのか？

校長 子どもによって状況が違うので、一律の姿をイメージしにくいところがある。不登校気味の子どもが転入した場合、どう原籍校につないでいけばいいのか悩む時もある。回数だけを入れるわけにはいかず、様々なパターンでつながっていくことも検討が必要

前田 子ども本人がどの程度望んでいるのかにもよると思う。

校長 実践していく中でご意見をいただきながら進めていくことが必要だと思う。

平賀 子どもの個性や背景によって課題がかわったりする。入院中も個別の本人が置かれている状況によって変化する。事前に羽曳野支援学校から積極的に情報発信し、交換をする必要があると思う。

校長 転入してからも、退院が決まったら、深く詳細に原籍校と個別情報を交換している。病院との連携の場で会議を開くこともある。

亀田 人権教育の実施だが、原籍校の子どもたちにも病気のあることどもたちのことと触れ合う問うことも人権教育を実施することになると思う。
クラウドサービス個別最適化の教育という事の一環か

校長 地域圏では、かなり進んでいる文科省の個別最適化教育を実施している。問題をしていく中で、AI で子どもひとりひとりの苦手な項目を重点的に、クラウドサービスの個人指導が羽曳野支援には向いているのかな。子どもの心を支えて学習も進めていくところが課題になると思う。どこかでは、教育の質の維持するためにこういうやり方も必要かと考えている。

亀田 1 学習能力の向上 2 意欲の向上 土の場面で向上させるかが課題だと思う。

校長 苦手な項目を重点的にやると効果が出るという事もある、効果が出ないこともある。

亀田 どの場面で向くか向かないかを教員が見極めることも大切

校長 連休中の宿題の代わりに端末を利用するのも羽曳野支援学校では利点がある。

平賀 大学でもオンデマンドの授業が増えてきている。ただオンデマンドだと全然モチベーションが上がらない学生もいる。小学生だと一人で学習すると意欲が下がらない子どももいる。

校長 まずは、使ってみて、何が使えて、どこに課題があるか検証していく必要があると考えている。

R 8 の学校運営について

校長 3～4 年が中期目標になっている。文科省から先日指示が出た。働き方改革の各都道府県単位で適切な計画を作るように言われて、計画に基づいて学校経営計画を作成することになった。クラウドサービスについて、もう一つ違うソフトを使用することを検討している。利用者の下限が課題となっている。少ないアカウント数で、違う子

どもに対して使うことができないか、企業と交渉しているところである。キャリア教育は今年度3分教室で実施したい。センター的機能については、羽曳野市近隣の市町村に広げていければいいと考えている。通級指導教室での実績を積み重ねていきたい。教科会をしても教材化の共有が十分にできていない状況がある。教員で教材のフラッシュアップの意味も含めて共有化を進めて域たちと考えている。共有化のプラットフォームを検討しているところである。人権教育を実施するにあたって、教員全体で情報共有しながら進めていくことをより一層進めたい。複数の分教室を一体運営することを施行したい。

平賀 基本的には今年度の学校教育計画を踏まえた上での来年度の計画だが何か質問等あるか。

委員 特になし。承認

R 8 年度学校教育計画は承認された。

4 学校教育自己診断 資料参照

前回に引き続き、今回はデーターの考察をした。《考察》の項目参照。内容についてはHP に乗せている。校長の学校経営計画にも載せている。

5 各分教室からの報告 前回報告以降の内容について報告

クリスマス会、オンライン修学旅行等の正月の書初めや獅子舞や正月遊びや節分での学校行事を中心に紹介、作業学習、病院にお世話になった人たちへのプレゼントを渡しに行く様子を紹介 貝塚遊学館からの出前授業をオンラインで行っている様子。ペット簿等を再利用した作業学習の作品を関係者に渡す、アトピー協会との贈呈式の様子などを紹介。

平賀 入院中であっても季節の大きなイベントをしっかり取り組んでいるのが分かった。

「学校に行くのが楽しい」が96パーセントは驚異的な数字だが、単に、教科の授業をするだけではなく 子どもたちのこころやからだの状況に丁寧に寄り添ってそっているからこそできることだと考えている。

あいさつ

校長 アトピー協会から今年は、ドローンを3つ、琴、さおり織り機等を使って羽曳野支援に来たからこそ体験する子を進めていければと考えている。羽曳が丘小学校に子どもたちの索引もあるので、みていただきたい。今後とも連携の輪を広げていければいいなと思っている。